

## 苦しみの場所 其の四

森 口 美 都 男

(まえがき 現代の日本でも、一体有意味に働くということがあり得るのか、働いてもよいのか、一体どう働くことがともかくも働くことになり得るのか。——こういう困惑を機縁として考えて来たことを、飛び飛びに印刷して貰っているが、顧みるに筆者の私憤をぶちまけただけの場合が余りにも多い。現代の世界で、真に現実に忠実に生きようとする人は、この種の私憤をこそ恐らく最も慎まねばならぬ筈であろう。かりに今日の日本にソークラテースが生きていたら、彼は何をするのであろうか。いな何をしないであろうか。——筆者をして今なおこの愚かを改めさせぬ力は、悲しいかな、結局、筆者がおのが魂を今も縛されたままに任している日本の自然、宗教から出ている、とある方から教わった。自己の魂の正邪、善悪、義不義、純不純、真善偽善はそっちのけにして、単なるわが身の利害吉凶禍福にのみ現つを抜かしているこの日日の終わる時は、——その時は来るか。来る。それは必ず来る。その日には喜び躍れ。)

### 九

死んでいるとは……生命を恩寵としてではなく、命令として持つということである。……死んでいるとは、生きなければならぬということである。このことはわれわれの自然の考えを怒らせる。

——D・ボンヘッファー(『創造と墮落』生原優氏訳)——

負い目の置かれる場所とはどこであろうか。それは常にわれわれの外ではないだろうか。責めらるべきは、われわれならぬ者、咎を受くべき者は、われわれではない、彼らではなからうか。少なくともこの私が、一般に負い目なるものの在りかとしてゐるのは、いつも私ならぬ他人、私以外の者であろう。前に七で考えた貸借なる関係に見られる特異な事情、即ち、私はいつも自分を貸し方と心得ており、私の相手をいつも借り方だと決め込んでいるというこの事実が動かぬ限り、また一般に借り方には咎への傾斜があるとも言ひうる限り、咎なるものも、少なくとも私によつては、いつも私の外方へ、私に対して他なる者の側へ措定されるほかはあるまい。

私の相手がではなく、自分の方こそが貸し手なのだといふこの独断は、もとより幾つもの違った形態を取り得るであろう。私が自分の方が恩恵者であり、利益の供与者だと心得てゐるのは私の貸し方根性から来る。恩に着せる私の態度が、折角の苦心（と私の思ひなすもの）を恩恵でなくしてしまい、却つて相手の怨みをすら招き易いのは、私の督促がましい勘定がいつも割高になつてゐるからである。また彼ではなくて私の側が被害者であり、犠牲者なのだといふ（私自身が心の底で如何にしても譲ろうとせぬ）憤懣も、彼ではなくて自分こそが貸し方だといふ頑な主張である。私は清算を迫まつてゐるのである。さらにまた私にはこれこれの働さがあり功績があり、美点長所があるのに、それを世間是一向に認めて呉れぬといふ類いの不平も、やはり自分の貸しが倒されてゐる、といふ不満の事例と見られる。

（註） 日本語には、「貰つて貰う」とか「取つて頂く」とかいう言い方がある。かういふ言い方があるといふことは、自分が他人へ何かを手え贈るといふことが、却つて与える側の負債となる場合のあることを示してゐる。「貰つて頂き度い」と私が言う場合、貰つて呉れるその人、取る主体はたしかに一応は私の相手方なのであるが、しかもその様な相手の取得が、実は彼の私への供与であり、私の方こそが最終的に受益者なのであること、従つてまたそれが私の希求でもあることがこゝで意味されてゐる。

供与者たる私は、与えながら痛み入り、拒まれることを怖れ、おずおずと貰つて頂けたら有難き俸せです、と申す。しかもこの種の言葉は、通常、その供与が、「貰つて呉れる」その相手を少なくとも第一次的には害しないものであり、必ずや相手を利することが期待できている場合にこそ脈絡に徹まつて用いられ得るのである。この場合、貰つて呉れる側が、受け取ることによ

つて何らかの迷惑を——第二次的に——蒙る可能性が憂慮されていることは言う迄もないが、きりとて、先方を害することに  
 なるに決まっている場合なら、われわれはこういふ言ひ方はしない。後者の場合には、われわれは却つて要心深くこの種の言  
 い方を避け、その細心によつて目的に達しようとするであらう（例えばわざとブッキラ棒に「君、これ要るまいね」などと言  
 う。なお日本語には敬語法という特殊な語法があるが、これも西歐語にないからと言つて、軽視すべきものではないと思う。）  
 右の様な重複語法の存在は少なくともわれわれ日本人の間では、恩恵を与えることが傷つけることになり、何かを失わせる  
 ことになり、恩恵を受けることが却つて傷を忍ぶこと、失うことでもあり得る、いな一般にそうなるという人間心理の了解が  
 常識に織り込まれていることを示している。人事のヤヤこしきというものも、大部分はこの辺りから起こつて来る。われわれ  
 は、自分がたしかに利益を供与される側、恩恵を受容する側でありながら、威丈高に「貰つて遣らう」と言うことがある。あ  
 るいは胸中ひそかに舌打ちしながら、へ気前よく貰つて遣らう、場合がある。また時には、「貰つて遣つて貰い度い」などと殊  
 更にサリゲなく言うことがある。自己なる者同志の *give and take* の關係は、そこでの一方あるいは双方の自己なるもの  
 の勢位が高まるにつれて、單純なものではなくなる。取る側が与える側に対して逆に恩恵者の位置に立ち得るのであり、右に挙  
 げた語法はこの位格關係の確認、了解の働きを表わすものと思われる。

貸しているのは自分の側だと決めてかかる姿勢は、この様に種々の場合に分かれる。しかし、どの様相での貸し  
 （と私自身の心得ているもの）の場合にも、それぞれに相關的に、私に対して債務を負っている（とされる）者、つ  
 まり私の（思いなしでの）借り方が、いつも私の外方へ置かれていてというこの一点は変わらない。そして八に述べ  
 た様に、負債者が、その負債の存在を否認し、従つてまた債主の存在をまでも否定しようとする場合、またその度合  
 いに応じて、負い目は浅い意味にせよ、深い意味にせよ、單なる借り、というものから何ほどか「咎」（あるいは「罪」）  
 の名で呼ばれるものの方へ移動し始めるものとすれば、われわれは互いに自分の側の負債を否認し合ひ、相手を貸  
 し方として認め合はぬのである以上、その限り、まさに咎の場所こそはいわばより高い勢位において各自の外に置か  
 れるほかはない。罪ある者は、現在の私ならぬ者、——私でなくて貴君、いな貴君は私の味方なのであればわれわれ  
 ならぬ彼（アイツ）でなくてはなるまい。いや、彼もまたわれわれの味方なのだとすれば、彼をも含めたわれわれ自

身の外なる他の誰か、恐らくは過去の世代（われわれ自身を除いた人類）に罪責が帰されるのでなくてはならぬ（とわれわれは言うであろう）。自然的な人間にとっての罪責の場所はどこまでもおのれの外である。

罪責というものが、この様に借りの一種であると言ひ得る限り、また自然的存在としての私は、常に自分の借りを過少に見積り、無事息災で暮せていながら自分を借り方とは考えておらず、借りの在りかを自分ならぬ他人の側に見ていると言ひ得る限り、罪責なるものは、それが重くなればなるほど、それだけ激しく、ますます私の外へ外へと、他へ他へと押しやられる。して見れば、逆に貸しなる状態の方は、当然、私の内側に位置づけられている筈として、さらに功績が貸しの一種である限り、またそれが辞讓の態度によっていわば勢位を高められた貸しと見られ得る限り、この功績なるものは、勝れて（高い勢位において）私の内へ内へと潜り行き、つまりますます深く私の自己をば、その自然的な場所として持つ筈であろう。

凡そ罪なるものが私にとっていつも自分の外方にだけ見えていることは、「罪」の語が私にとって十分な、いな幾らかでも具体的な意味を持ち得るのが、一般に私が「罪」を私ならぬ他人に帰し、その他人のうちに見ている場合に限られていることから分かる。逆に、私以外の人々は、あらゆる種類の、あらゆる様態の罪や咎をば、この私の心の内部に見抜きうる位置にあると考えられるであろうが、この場合にも私は猜疑しつつ、自分を、見る者としての彼らの外部へおいて考えているであろう。私にとっては、ただ自分の功績、自分の与えつつある恩恵のみが、現に否み様もなく自らのものとして見えているのである。私が自分自身の内部に自分自身の罪責を見極めようとしてどれほど殊勝に眼を凝らして見ようと、凡そ罪責なるものは、私自身の内部へ位置づけられるや否や、その存在を、いなそもその意味自体をすら消し始め、稀薄な曖昧なものになり始める。「罪」という文字が無意味同然のものになって来る。そこに見出されるものは、実はもはや罪と言わるべき力ではなくて、「罪」なる語についての辞書的定義にすぎず、生かしもせず、殺しもせぬ、色褪せた空想になり終わっているでなければ、せいぜいその位置が結局はま

た自分の外方に置かれた、私ならぬ他人の罪のいわば反転像、虚像、ないしは私が責めたてて止まぬ他人の咎のいわば中和変様に変えられてしまっているであろう。

ではわれわれは、苦しみなるものはどこに感じているであろうか。言うまでもなく、それはわが身に即してであろう。私が苦痛を感じ憂悶を覚えるのは、常に私自身において、特に私の内奥においてであろう。自然的な人間にとって、苦しみの第一次的な在りかは、咎の場合とは逆に自己なるものの内と考えられる。

恐らくこう言えば、母なる者は、わが子の痛み、苦しみをば、直下に自らに感じ得ると言われるでもあろう。「身二つになった」母にとって、わが子はもはや彼女とは区別された他の個体であるにもかかわらず、しかもわが子の苦しみはそのまま母親自身の苦しみであり、彼の苦しみは吾が身の苦しみと一枚になっているとも言われよう。他人の痛さを知るために、わざわざ吾が身を抓って見るに及ばぬ場合がここにあると言われるであらう。——だがこの場合、母なる個体に対して、その子たる個体は、一体どこまで他者の意義を、自己ならぬ者の意味を持っているであらうか。ここでは他者の苦を苦しむとは言っても、それは結局、単に自然的な哺乳的生命の未分性に発するものではないだろうか。換言すれば、子の苦しみが母の苦しみであるのは、母たるものの個人人格から子たるものの個人人格が独立していないためであり、またその程度に依じてではないだろうか。母親はたしかに、わが子の痛みを痛く感じ得るとしても、子の方は母の苦しみを同じ様に苦しみ得るわけではない。ここには含むものと含まれるものとの関係が入り込んで来る。そして幼児には痛苦はあっても苦惱なるものは欠けていよう（三を参照）。（近頃では若い母親が自分の腹を痛めた——無痛分娩とか言うことも聞くが——幼児を殺してしまう場合が往々ある。この「母」とは呼ばれ得ぬ母親は、「福祉社会」の気の毒な犠牲者なのではあるまいか、と私は思う。証明は略するが飛躍はない心算。）

また「友の憂いに我れは泣き、吾が悦びに友は舞う」と言うことも全然ないとは言うまい。曾ってはこの様に歌わ

れ得た「友情」なるものがたしかにあった。醜陋を極める現代の日本にも、例外的に——真に例外的に——存在してないわけではない。私は現にその稀な事例を知っている。しかしながら、この種の同慶共苦の裏にも、直ちにまた、「敵の憂いに我れは舞い、吾が悦びに敵は泣く」ということが余りにも屢々付いてはしまいか。苦しみの在りかは、やはり吾が身であり、身にすぎない。吾が身というものが必ずしも精神・身体的個体には尽きぬというまでである。そして身内が割れるという危険は、どれほど親密な家中にも常にあり、それら個体の共同の敵たる他者——現勢的な他者であれ潜勢的なそれであれ——が、弱るか消え去るかすれば、またそれら個体のいずれもが他に服するということを肯んじなければ、忽ち昨日の友が今日の敵となることは、それこそ誰しも知る陳腐極まりない事実ではあるまいか。同慶共苦の關係は、一般に主従、貴賤、上下の位格が鞏固に保たれている限りの共同的生のうちにしかあり得ず、この共同的生にしても、この共同体全体の他者、とりわけその顕然たる敵を持つていることによつてのみ、漸く危くその統一を維持し得ているというのが、曾つても今も現にある世界の事実であらう。人間が善と惡との別を知つて以後、分裂というものは、女が子を生み男が働くこの世界のそもその根柢にあるのである。そして互いに分裂した断片的生命——男あるいは女である個体もその一つ——に即して、特にその内部に苦しみるものがその自然的位置を持つことも、世界のこの同じ構造の根柢から発しているものと考えられるのである。

苦しんでいるのは、誰よりも彼よりも、他ならぬ此の自分である、自分だけである、自分をおいてこの苦しみを嘗めている者が他にあるとは思われぬ、また自分のこの苦しみを解ってくれる人など（師であれ、親であれ、友であれ）金輪際いる訳がない、という念い——こういふ念いは、その深淺に多少の違いはあつても、また持続的と一過的との別はあつても、恐らくは誰しもの胸に宿る念いではないだろうか。

われわれが自分の内でない場所に苦しみを認め得るとしても、それはただ、自分に危害を加える惧れのない者に対して、恐らくその限りでだけ、多少その者の苦しみを自らへ分かち得るのみ、と言えまいか。われわれは自分よりも

無力な者、か弱い者の痛みは痛み得ても、自分よりも少しでも力強い（と思える）者の苦しみであれば、むしろそれをこそ却って快とさえ感じる場合が多いであろう。自分に危害を加える力のない者、か弱い者とは誰か。言うまでもない、——それは私の支配下にあるもの、私が食らいうるもの、私が自己の存在へ吸収し得るものことである（二）。

他人の苦しみを共に苦しみ得ること、感じ得ること、——それは、その他人がより多く私にとって他者であるに依りて、それだけより困難なこと、不可能に近きこととなる。曾っての日本にはあつた母なる者が吾が子の苦しみを自らのそれとして苦しみ得たのも、また友ある者が友の憂いを自らの憂えとなし得たのも、それさえも、そこにまだ真に深く他者と言わるべきもの、従つてまた自己なるものが無かつたゆえの場合が余りにも多かつたであろう。

聖なる者の聖たる所以は、彼自らの内部に世界の内なるすべてのものの罪責を負い、かつ彼自らの外部の、至らぬ限とてはないすべての場所に、生きとし生けるものの苦しみを悲しまれた点に、今日もなおその悲しみのさ中に居られる点にある。

彼にあつては、彼の外なるもの一切苦がそのままに、いなそれ以上に感じられており、しかも諸人一切の罪業が彼一身の内へ集約されている。罪なき者が、自ら一人のみを罪ある者と見る。その様に生き、働き、かつ死に、そして永遠に生きられる。だがわれわれ聖なる者から逃げ去る者にとつては、罪なるもの咎なるものは、すべてわれわれ自身の外に見える。外にしか見えない。私自身の内にある罪は、それがますます私の内奥深く位置しているに従つてそれだけ、凡そ功罪なるものを見る私の眼のいわば死角に入るかの様である。私が私自身に即して、その内に見得るものは、専ら自らの功績でしかない。そして私に他なる者の功績が今度は私の視野の死角に入る。また恰かもそれに依りて、他人の安楽は見まいとしても眼につき、彼の患難、苦悩が却つて当方に快く感ぜられる場合が決して少なくはない。——その様なわれわれは永遠の生を願ひ得ない。生をせいでいただ命令としてのみ生きてゐる。そしてそれが死

んで、い、る、と、い、う、こ、と、な、の、で、あ、る、。

他人の身になってみる、ということが言われる。だが、それは実は、自己が殺されるところでしか可能でない。自分が他者を処理するものとして生き延び乍ら、しかも同時にその身になる、などということは出来ることではない。自己が死に臨んで腕く時、その時はじめて自己の他に對する隔てが消え始め得るであろう。私によって処分されるものが居るのと同じ事態へ、その時はじめて現実におかれ得るであろう。他人の立場へ身をおいてみるということは、単なる意識上の操作などで出来ることではあるまい。<sup>(註)</sup>私が現実(註)に叩き潰されて呻く氣力も失せ果てた時、その時はじめて私は一匹の豚であるのである。その時になってはじめて、観測する我れ、利用する我れ、食らう我れ、對手を始末する我れが消え去り得るのである。そこにだけあるがままの豚が居るのであり、豚にひとしい私なるものがあるが、まが有り得るであろう。死に臨んだ者がはじめて實在の底を垣間見ることが許されると言われる。死に克ち得るよすがも生まれると言われる。

(註) 普通イントロスペクションの対象とされている様な内界は、「内」とはいい条、実は単に今一つの「外」であるにすぎない。かかる外が消え去る時、従つてまたかかる外の相関たる内が消える時、その時はじめて、外は、つまり「延長した」外も、「思惟する」外も、凡そ外なるものが内なるものとなり得る。そしてこの意味で外をでなく一切の内を見得るに至つてはじめて、つまり私に對する外が消えて自身内となり終わり、外に對する私が既に無くなつてゐる時にはじめて、外をではなく、「内を見る私」としての我れ、實在の内に漬かつた我れが實現され得るでもあろう。その時はじめて、私は實在の外に、實在に向かつて、實在から除外されてあることを止めるのである。その意味では内外が転換するところのみ、真に内なるものの實現があり、この場所からはじめて、外なるもの一般が、今や救わるべき者としても把握され得るのであると思う。それは自己の内へ移された自己、自己と一つにされた自己とも言ひ得よう。そこではもはや敵の憂いに私が舞うことはない。かく自己と一つにされた自己に對してのみ、自己が罪であることも蔽われることなく露呈されて来よう。

だが、内外の別というものが凡そ無いところでは、罪責も苦惱もその場所を持つてすがががない。その極限では罪責



も苦悩も存在し得なくなる（人間以下）。内は内、外は外として、従ってまた内と外との境目たる私というものが凡そ存在していないところでは、負債も受難もあり様がない。ましてや、罪責と苦悩とがいわばその場所、方向を転換して、私が、私ならぬ他の人々の苦しみを共に苦しみ（同情）、他人ならぬこの私の負い目以外に、負い目なるものを知らぬ（悔悟）というこのことは、全くのナンセンスとなるほかはない。

苦悩というものも罪責というものも、ただ私の内と外とがしっかりと保証されている限りでだけ、真正の苦悩、真正の罪責として体験され、また現存もし得るのである。聖なる者、聖を希う者にあつてと、これとは逆の向きへ走る者としては、苦悩と罪責の見える方向が逆になる。前者では専らその内で負われている罪なるものが、後者によつては専らその者の外方に、他者の上へ負わされる。前者が彼の外にしか感じまい苦しみを、後者はひたすら自らの内にしかあり得ぬものと思ひなす。

生ける者に、凡そその内・外のある所にだけ、また罪責と苦悩とが本来あり得るのだとして、罪業・苦患が内・外に先き立つのか、それとも逆に内・外が罪と苦との根柢をなすのか。——この問いは真に困難と言うに値しよう。だが、曾つてはあつた内と外とがいわば乖離し、もはや内は内でなく、外は外でなく、内もなく外も無くなつてしまつた今日の様な世界では（またその様な内・外の消失の甚だしさに応じて）、苦悩と罪責ともまた乖離し去つて、苦悩は苦悩として耐えられず、罪責が罪責として負われなくなることは必然であるう。苦しみの無い世界、罪を知らぬ世界、——それは思うに、もはや人間の世界と言えるものではあるまい。生を享けた嬰子が「母」なる人の色情のゆえに生命を奪われる。この「世界」をなおも世界として保ち得る力は、聖なる者中の真に聖なる者において何があり得ようか。

繰り返して述べた様に、現代では——特に現代の日本では——犯罪の容疑のない職業は恐らくはただの一つも無く、

俯仰天地に恥じるところのない労働も完全に跡を断ったかに思われる。政治家、官僚、教育者、技術者、企業家、医者、僧侶、交通労働者、農民、商人は言うに及ばず、どの様な目立たぬ働き、どの様な控え目な、例えば新聞配達や廃品回収の様な勤めでさえも、世間の要求通りに精励している限り、必ずチャホヤされ、外遊などし、それがそのまま悪事を働くことにもなってい兼ねまい。無責任でない「責任編集者」が、一体幾人あるのだろうか。賞を貰った作品も、写真や図案には限らず、また医薬品や辞書類にも限らず、盗作でないものは真に稀なる例外と言うほかはない。今日では尿尿汲取人のうちにさえ尊敬すべき人士は少なくなつた。ありとあらゆる職業に携わる、生きとし生ける人間が、一人も残らず、ひたすら自分の罪惡汚辱を潔白にし得る力を自己の他へ希うしかないということが、今ほど直截簡明に、万人の眼に瞭らかにあまなつたことは未だ曾ってなかつたであらう。

私の抱懐し得ている、よし億兆の真理をも無効に歸し得るたつた一つの虚偽なるものが私の内部にあり得る（ベルジャーエフ）とすれば、私が嘆きつつある自分の千万の汚点をただの一点をも残さず拭い消し、真に純白となし得る一つの、真理もあって不思議はない。いな、私自身の眼には見えておらぬ——前述の如くそれが私の内にある限り、それは見えないのだ——無量の罪責をすらも、無きものとなし得る無限の功績があつてこそ当然であらう。實在する私の罪の量が、私が微かに気づき得ているその量とはオーダーを異にして大であり、私の有限の力に比してはたしかに無限のものであるとしても——それは事実そうあるほかはあるまい——この無限をすらもゼロとなし得る、より高次の無限が有るといふことこそ、実にまた当然中の当然でなくてはなるまい。

## 十

墮落以前に良心は存在しなかつた。……人間を神からの迷走に駆りたてるこのことこそ、まさに良心の機能なのである。

——D・ボンヘッファー（『創造と墮落』生原優氏訳）——

自分が少しも間違っていない場合に、少なくとも自分ではそう確信できている場合に、「貴君は間違っている」と言われて憤懣を感じない人はあるまい。だが、自分が実際に間違っていて、「貴君は間違っている」という指摘を受けた場合はどうであろう。特に、その指摘によって、そのお蔭ではじめて自らの誤りに気付き得た場合はどうであろう。こうした場合にわれわれの覚える感情は、憤懣とか不満とか呼ばれるものと果たして逆方向のものだろうか。前の場合ではなくてむしろ後の場合にこそ、われわれは、真に創傷きずと言ひ得るものを受けるのではないだろうか。——他人がではなく、まさにこの自分の方が間違っていたこと、自分が間違ってしまったことをこそ憾みとし、真に悶えると言わなければならない層が、われわれにはあるであろう。

自分の言ったり書いたりした言葉が間違っていた場合、それを訂正することは、それとしては奨められるべきことである。だがこの訂正を、何の底意もなく行なうことを、果たしてわれわれはなし得るであろうか。自分の言説が、何ほどか創見なり洞察なりを（ひそかに）標榜し得られるものであることの大きなるに依じて、また些細な事務上の打合わせなどではない度合いに依じて、われわれが自ら施したその訂正には、つまり訂正が自分からなされたということには、ある特異な傲りがついてはいはすまいか。またその間違いの摘発、訂正が他人の手でなされるのであれば、全然訂正などされぬ方がよかったという念いが、われわれにはあるのではないか。凡そ誤謬の訂正が行なわれるとすれば、それは是非とも自分自らの手によるのでなくてはならぬ、という念い、——この念いの志向は、誤謬の除去そのものではなくて、誤謬を消したこの自分の価あたいいというものである。

われわれは一般に、他人の言行の当否や真偽にはもともとさしたる関心は持っておらず、彼の正しいか否かがわれわれ自身の関心事となって来るのは、ある特殊な条件の下でだけであると思う。即ち、ある人の言葉の真偽が、この私自身の言葉の真偽を、そこからしてまた、私なる人間の正、不正を何らかの仕方で左右してくる場合に、そしてた

だその様な場合にだけ、私ではなくて私ならぬ彼の言葉の真偽にも私は無頓着でおれなくなつて来るのではないだろうか。実際、自分に間違ひがあるということ、あつたということ、わけてもその言葉が重大なもので、自分という人間に汚点があるということ、濁りがあるということをまで含意してくる場合、ただこのことだけが私にとって真にどうでもよくはない唯一のことと言ひ得るのではなからうか。智慧の名に値する言葉を口にするためには資格が要る。自らに傷のある者が、他人の同種の傷を咎めること、ましてや嗤うことは許されない。淫奔者が他人の淫奔を罵ることは出来ない。その言葉がよし真実に当たつていようと、それは論者の資格問題を引き込んで来る。無智の者が他の無智を嗤うことは出来ない。

われわれが、自分自身の欠点、短所、虚偽、失態を棚にあげて、他人のアラさがしにばかり精を出していると言われなくて済む日というものは、恐らくはただの一日も無いかも知れぬ。「目糞、鼻糞を嗤う」の図が伴りのない自己の姿とも言われ得よう。自分の胸底も原始宗教のほだしの下にありながら、原始的迷信を侮蔑しているのが自分の実相であるだろう。しかも、私の目につき私が見逃さぬものは、自分ではなくて、他人の過誤や失態であるとしても、しかも、私がそのゆえに安んじ得ぬと真に深く言わねばならぬものは、実は決して他人の欠点や短所、虚偽や非行そのものではないと思う。他人がどれほどの大罪を犯していようと、どれほどの昏迷・誤謬のうちに沈淪していようと、それは要するに文字通り「他人事」にすぎぬ。それは私が真に深く、本気で気に掛けていることなどではない。その無いことを私が真に希つて止まぬものとは、——自覚しているか否かは別として——やはり自分自身、身の誤謬であり、虚偽であり、罪過である。それが消し去るに術もなく確定された罪過である時にこそ、身も世もなく嘆かずにいられぬという——そういう心の層が、たしかにわれわれの心の内部にもあると思われる。ある著名なイギリスの神学者は、まさに自分の罪のゆえに、ほかならぬ自分の罪が自分の眼には隠されるという真実に十分の顧慮を払いながら、また「咎の赦し」が「罪の自覚」に先き立つことをも教えながら、しかもおのが罪に対してわれわれが決し

て全盲なのではないこと、われわれはそこまでいわば一〇〇%の罰を受けているのではないことに注意を促している。自分がそれをいう資格を欠いていることを口にしてはならない。しかし一切の希望を失うこともまた許されない。過度の自己譴責、過度の自己暴露は、それこそが却って傲りの表現であり得る。われわれが、自分の知らぬことをあからさまに知らぬと言い得、些かも知ったかぶりをせず居れるなどと思うならば、それこそは真に恐るべき思い上がりではないか。

実際、われわれには、自分が何か誤りを犯し、そのことに気づいた場合、自分以外の誰かに正される以前に、その他人の指摘に先き立って、他人からの糾問を防いで、いわば未発の間に自ら自分の手で、訂正しておかねばならぬ、是非にもそうしておきたいと思う場合が屢々ある。そして、自分自身によるその訂正の先を越して自分ならぬ他人が訂正、矯正、斧正を加えてくれるれば、忽ち口唇の辺りに顔面筋の硬ばりを覚えることがある。これは動かし様のない事実である。この様な場合、われわれは、その矯正をどうにでもして無効のものとなし、その誤りを自分の誤りとしては認めまいという姿勢をおのずから取っている。そしてこの場合、その指摘の方にこそ誤りがあること、少なくともそちらにも瑕瑾きずがあること、かりに当方に誤りがあるとしても、その指摘者の犯している誤りに比べれば軽微些細の不注意にすぎぬことを、決定的に、また対抗的に立証できまいかと思わず知らず身構えているであろう。自分が正されることをよりも、他を正すことをわれわれは好むのである。この種の念おもいは、言うまでもなく、私の内なる「我執の人」の念いである。

思想や見解の当否、正誤、真偽の場合に限らず、一般に正ズラスの価値と負マイナスの価値の位置づけは、我れなるものの存在によって生じた、いわば力場の効果を受けるかの様である。恰も火が上方へ、土が下方へ向かう性状を持つものにも似て、正の価値はこの我れなるものの内うちに、負の価値はそれの外そとに、自然に引き寄せられ、あるいは押し遣られるかの趣きがここにも見られる。

だが右に言った様な念いは我執に出るとして、しかもそれは人間であれば誰にでもあるというわけのものでもない。他人の親切心に出る矯正、訂正を極めて淡泊に——だが感謝の心を持ってではなく——受け容れ得る人があるであらう。いな恐らく、そうした他からの矯正をさして氣に留めぬ人の方が多くてこそ不思議はない。ことによると、自分の誤りを最初に指摘し、匡正する者が自分であるか、他人であるか、などということが何故凡そ問題になり得るのか、怪訝の思いに耐えぬと言う人こそが、われわれの中の大部分を占めていとも考えられる。だがここで注意せねばならぬことは、他人による矯正を厭わぬ——と見える——心は、決してただ一種あるだけなのではないということである。

まず、かりに無謬の人があるとすれば、そういう人は、他から正そうにも正し様がない。また恰も嬰兒にも似て、いわば正誤の以前にある者も、他者からの矯正とか訂正とかに對してもとより無縁であらう。

次に、無謬ではなく、間違いだらけでありながら、しかも真偽、正誤の区別というものに対して無關心な人、氣のない人——「人間」と名がつけば、人間が「理性的動物」たる限りは真偽に全然無關心ということは本来あり得ぬ筈ではあるが——は、その無關心さの程度に應じて、他から正されるということにもまたそれだけアッサリしていられて当然でなくてはならぬ。そういう人々は、もともと自分自身の過誤、邪曲、虚偽などに対しては恬淡であり得、自分の存在の創傷きずというべきものを氣に病むこと自体が有るか無きかなのであって見れば、自ら正しからぬ所を正すことはもとよりあり様がないとして、またかりに他人がその正されるべき誤謬を指摘する勞を取ってくれたとしても、まずは他人事ひとことの様に聞き流して済ましていられるに違いない。この種の人は、「貴君は間違っている」という種類の言葉に対して、いわば無傷、不死身であり得よう。また「貴君はまことに寛仁大度悠揚迫らぬ大人だ」と言われてまだニコニコしていることすら可能であるかも知れない（大学教師にも多い）。勿論「他人事ひとことの様に」という言葉がここでも何ほどか自然な脈絡へ篋まりこみ得る限り、彼にも自、他、の別、ということまでがその関心外なので

はないとして、ここでは少なくとも真偽、正誤の別が自他の別に関与し、後者に重く触れて来るという事態が何ほどか欠如しているとは言わねばならぬ。

(註) 人間はもちろん単なる「理性的動物」と言うには尽きない。「人間」を類と種差とで定義する場合、昔から随分様々な試みがなされて来たが、「理性的」という種差も、「言葉を使う」、「形而上学的」、「火を使う」、「道具を作る」、「政治的」等々とひとしく、——浅薄とは言えぬにせよ——抽象的、一面的な規定に過ぎまい。「笑う動物」とか「自殺する動物」とか言えば、より具体的な規定になろう。そして前に出した「忘恩の動物」(ドストエフスキー)と言うことになれば、これはさらに一段と十全な規定であり、そして「自覚している」と否とを問わず宗教を持つ動物」(坂田徳男先生の御教示に負う)と言えば、恐らくこれ以上に深い規定はないと言ってよいであろう。

だが、右の最深の規定を理解することは真にむずかしく大学を出た位では絶対に解からない。そこで誰でもが知り過ぎるほど知っているものであるとともに、真に完全と言ひ得る規定を挙げるとすれば、それはやはり「その生殖器を覆っている動物」という規定ではないだろうか。生きとし生けるもののうち、醜い交接器官を持った生物は、人間以外にはない。この点で人間は顕花植物の恰度逆の極に位置している。人間は、そして人間のみが——現代の様にあらゆるセンス、ボン・サンスが殆んど鈍麻し尽くした時代になっても——丸裸ではよう出歩かぬ動物なのである。今日のいわゆる先進文明国の婦人の服装は、野蛮人のそれに著しく酷似して来たと言われているけれども、ともかく身体の一部を包み隠している点で、彼女たちもお、ゴリラやチンパンジーとは一線を劃していよう。現代の人間、特に婦人がクラゲとどうにか見分けられ得るのも、矢張り恐らくはただこの一点のみによつてであると考えられる。自身汚ならしい存在の一人ながら私は如実にそう感じる。人間以外の動物に穢らわしいものは居ない。汚ならしい植物というものは絶無と言ってよい。生きとし生けるものうち、汚ならしい存在、穢らわしい存在というものは人間以外には見当らぬ。そして人間という人間は、老若男女を問わず、その人間である限りにおいて、必ず——いや例外者は存在するからその方々を除けば——汚ならしく、かつ穢らわしいと言ひうる。マックス・ピカートが、現代人の「多くの顔は、まったく生殖器そのもの様に見える」と言い、現代を「鞆丸の上昇」ascensus testiculi」という言葉で描破している(『われわれ自身のうちのヒトラー』)のも、至極あたり前の事実を述べているに過ぎない。少なくとも今日の西欧は、単に宗教以後と言つたのでは足りぬとも言われている。信仰を宗教から区別したのでも、もはや足りぬと言われている。「西欧的無神性はそれ自身が一つの宗教なのだ」という洞察が、二十世紀に入つての西欧キリスト者中のキリ

スト者たるD・ボンヘッファアのあの生死を可能にしたのであった。

右の様な人の場合には、真実とか、正当とかいうことがらが、この自分にはなく他人に組しているということ自体が、自分には関係のないこととされていくわけであるが、ここでは当然また、私の自己というものが真実そのものに対抗して存否を争うとか、真実そのものへ勝負を挑むとかいう事態も欠如している筈であろう。この場合には、自分が他人——目下の他人であれ目上の他人であれ——からの矯正を受けても一向に痛くも痒くも感じないという事態は、突きつめれば、「ソークラテースには余り気兼ねせず、真実の方をはるかに一層大切に考えて」と言うかの言葉（『バイドーン』）が、その人にとっては無いも同然であるという事情に発していよう。だからより正確には、ここでは自分が誤謬から救い出されるということへの志向がはじめから欠けていた、と言わねばならない。だが、この種のことを余り執拗に言いたてれば、「〈真理〉の〈誠実〉のと殊勝らしいことを言って国力の発展を邪魔しないで貰いたい」と××省の局長などが居直って来兼ねない。あるいはもっとサバけた人なら、「偽善もほどほどにして貰いたい」という含みの苦笑をすら投げて寄越し兼ねまい。だから、この種の人（私自身のうちなるこの種の人間）にも諍う心、自分を守るために他人を傷つけることを辞さぬ念いはあるわけであって、正負の対をなす価値が、例えば損得と言った別種のものとなれば、自他の別は、十分以上の関心事となって来るであろう。「国家にとっては決して真理が問題ではなく、ただ自分にとって有利な真理が問題であるに過ぎぬ」（井上政次氏訳、傍点筆者）とニーチェは書いている。しかし、真理がではなく、自分に有利な真理が、いな「半真理であろうが誤謬であろうが、凡そ自分に有利な総べてのもの」（傍点筆者）にしか関心がないというのは何も国家だけではない。

しかも、上の様な言葉なり無言の皮肉なりを向けられる側が受ける傷は浅くはあるまい、——その相手が、よしどれほどの大衆人間であろうとも。けだし、投げつけられた言葉や含みには正しいところがあるからである。彼は、自



らがパリサイの徒であること、実は自分の立つ瀬を眞実などとは比較にならず大切にしていることを認めざるを得ない。だからこそ、自ら正し得るに先き立って、他人からの矯正を受けることを彼は肯んじ得なかつたではないか。もし彼が眞に、眞実をば自分をよりも大切に思っているのであれば、虚偽を否定し、眞実を顕彰する者が誰であらうとも、それは問う所ではない筈である。そうではないか。私の誤謬が正されることをも、いなそれをこそ、私の虚偽が正されることとして、他人の虚偽が正されること同様に、いなそれ以上に、悦び得る筈である。そうではないか。して見れば、彼が些さかの反省を試みるとき、「眞理」だの「誠実」だのという言葉が口にして、それを邪魔にされ嗤われても、そういう彼としては、一言半句の返答もなし得ぬ筈であらう。しかも、彼は、その自信のなさ以上に、自分が眞理に全く不忠実なのではないことを、自分が決して何時も何時も「パリサイの徒」という許りなのでもないことを、いな少なからずパリサイではあるとして、しかもこの咎を消し得て余りある功績をもひそかに誇り得ることの方をこそ、如何にもして証示し度く思い、その工夫に遙かにより多く心を奪われてもいるであらう。彼が自分の誤りの訂正に無関心ではいられないということは、彼の眞実への有縁を示しているではあろう。しかも、彼のその眞実への関心は、結局、眞実のゆえの眞実への関心では決してなくて、自分のゆえの、自分のためのそれへの関心であるだろう。

だが、他人による矯正を拒まぬ心は、いつも眞偽そのものへの無関心、眞理獲得への無欲恬淡からばかり発しているようか。——改めて問うまでもない。ソークラテースが他人からの矯正を歓迎したことを知らぬ人はあるまい（と言いたい、私はつい先き頃まで知らずにいた）。ニーチェの書いたものの中には、この事を認めぬかに読めるものがあるが、他面、彼は「ソークラテースは吾々の所では生きられなかつたろう」（『教育者としてのショーペンハウエル』）と書くことによつて一九世紀の文化俗物を痛罵している。ニーチェこそは、他人からの矯正を拒む者の中の巨人であり、教えられることを拒んで、ひたすら他を教えようとする者の総大将であつたとも見られるが、彼はむしろ、他ならぬ

ソークラテースを向こうに廻して、自己をよりも真実を大切にする点でこそ、後れを取り度くなかったのではないかとすればまた彼自身、ソークラテースに劣らず、教えず教わろうとする人であったのであり、むしろこの点でこそニーチェは他の何びとにも、敗れ去ることを承知できなかつたとも考えられる。だがソークラテースの方は、ニーチェとの勝負などをよりもどこまでも真偽の方を一層大切にした。そして一般に認められる所に従って、彼がもし誤った場合には、彼のどの様に些細な誤りをでも、他のどの様な誰によつても正されることを心から望んだ人であった。彼はひたすら教わろう、聴こうとした人であつて、教えよう、話して聞かそうとした人ではなかつた。それが、ソークラテースの神意への忠実ということの意味であろう。ということはまた、人間を越えた者を拒む人は、その拒むことの頑なるに依じて、真理をよりは結局自分を愛しており、彼が細心に虚偽を避けることに努める場合にも、それは結局は、真実のためではなく、自分のため、真理と区別された自分を利するためではないことを告げていよう。

——真に感嘆に値するニーチェほどの人にして、矢張り勝他、他の心が愛智の心を凌いでいたのではあるまいか。それがよし、われわれには思いも及ばぬ山顛の高みに於ける葛藤ではあつたにしても。

(註) 人間が苦悩を苦悩の故に意志するということは、可能であろうか。ショーペンハウエルは、苦悩をもって人生の本来の目的となす点に、キリスト教の真髄を見ていた。ニーチェはある意味では苦悩をそれ自体として、また積極的に肯定した人とも言われ得よう。少なくとも苦悩への意志をば、本来存在すべき意志として主張したと言ひ得るであろう。ショーペンハウエルの見所が正しいか否か、少なくともどこまでは正しいと言えるかは別として、ニーチェが十九世紀に於て、「キリスト教」をではなく、ナザレのイエスをまじめにとつた、有るか無きかの一人であつたことは冗言を要すまい。ニーチェはイエスについて語るのではなく、イエスと同じ地盤に立つて生きようとした。しかし彼も畢竟、単に著作家の一人——著作家なる者は真に感嘆さるべく真に畏るべき人々ではあるが——にすぎない。そしてその限り、人間であるところの彼が、自ら苦悩を苦悩の故に肯定する存在者ではあり得ぬ筈である。語ることに、書くことに、詩うことは、それがどれほどの苦しみを要求しようとも、まだ苦しみそれ自体とは言われ得ない。彼も結局、その様な存在者について、来るべき者について、即ち超人について、単に語り、かつ詩つたにすぎぬ。如何に「高貴な仕方で」出版したとは言つても、自分の本を「高貴」などという形容詞まで

添えて出版せねばならぬ受膏者というものが可能であろうか。ニーチェは確かに自ら最高度の苦惱を経験した人であつたらう。それに耐えたとも言われ得よう。かつてあつた単なる人間のうちでは最も毅然と苦惱した人の一人であつたとさえ言つてもよい。しかしこの彼の苦惱もなお十分に純粹な苦惱ではなかつた。彼もやはり苦惱をではなく救済を求めていよう。いわゆる安樂がではないが、やはり救済が彼の目標であつたと思う。——そして言うまでもなく、救済とは苦惱からの離脱以外のものではない。ただニーチェは自己による自己の救済でなくては承知出来なかつた。

われわれが気にかけている他に対する勝利が、眞実そのものを犠牲にして追求されるものである限り、その様な勝利が人間として求むべき最終のものである筈がない。しかしまた、勝利なるものが、それとしてもとと求められるに値せぬものなのであれば、洋の東西を問わず、人間中の人間、優秀者中の優秀者と言われた人々の心をこうまでも深く煩らわせる筈もない。勝負というものが、事実として眞偽以上に人類の代表者と言わなければならない。プラトーンが氣つけて来たのは、勝負なるものが人間存在を深く根柢から制約しているものであるために違ひない。プラトーンが氣ある者に割りあてた勝他心アイロキヤは、たしかに愛智心イロソフィヤに劣るものだとしても、この種の勝利への関心をばその転落形態ないしは滅価変様として持っている様な眞実の勝利なるものがあるのではないだろうか。そして、この、いわば本来相対の勝利は、單純に眞理の下位に置かるべきものではないのではなからうか。

人間が言葉によって生かしもされ、殺しもされるといふのは、一体人間が何者だからであらうか。

私が、自分の間違ひを正してくれる言葉によって傷つくといふのは一体何故であらうか。私を正してくれようとする言葉によって、私は決して決して決して素直に正されたりするものではない。むしろ逆に、我見に執する構えを強化し、殺意をすら抱かずにいられぬのが事実である。何故であらうか。他を正す言葉には叱声もあれば皮肉もあり、その様相はさまざまであるとして、いな沈黙ですらあり得るとして、それが実効を収め得るためには常に人心の機微を深く

察して言われ、あるいは黙もくされねばならぬのは何故なのであろう。いないな、他を深く正す言葉が現実<sup>いひ</sup>に他を深く正し得るためには、結局その様に正す者の生命いのちが棄てられねばなくなるのは何故なのであろう。私が、私を正してくれるまさにその者をこそ殺害せずにおれぬのは、私が一体何者なるが故なのか。当然自分の眼の死角にはいる自分の非の正し手を進んで他者のうちに求めるといふ態度がかくも取り難いということ、不可能に近いということ、——このことはわれわれの存在をどういふものとして示していようか。私の最終の関心が真理の存在にではなく、他に勝って真理に貢献したとされるこの自分に、いな虚偽を虚偽と認めぬ自分にさえ、専ら他ならぬこの自分の存在にのみあるといふこのことは、私が何者であることを告げるものなのであるか。正しさの場所を常に自分の内部へおき、「やはり自分の言った方が合っていた」、「御覧、私の言った通りになったではないか」と眩くらかすにはいられぬこのウズウズした心のもとは何所にあるのか。それはわれわれ人間のどういふ性状を示すものなのであろうか。

(未完)

(筆者 京都大学文学部〔倫理学〕教授)